

日系アメリカ文学
——強制収容所内の文学活動②トゥーリレイク収容所——

篠田 左多江
(昭和63年9月30日受理)

Japanese American Literature
——Literary Movement in Tule Lake Segregation Center——

Sataye SHINODA
(Received September 30, 1988)

はじめに

第2次世界大戦中アメリカ合衆国において日系アメリカ人が収容された10カ所の強制収容所のうち、トゥーリレイク収容所¹⁾は特殊な意味を持っていた。1943年2月におこなわれた忠誠登録の結果、合衆国に不忠誠の人びとを多く収容する隔離収容所 (Segregation Center) となったからである。したがって所内では公然と日本精神の鼓舞や讃美がおこなわれたばかりか、明治節や紀元節といった日本の祝日の行事も多数の参加のもとにおこなわれていた。1945年8月、広島、長崎に原爆が投下されて日本の降伏が決定的になるまで、これら不忠誠グループの一世および帰米二世は漠然とはあったが、日本へ帰り日本人として生きようと考えていたようである。市民権を認められていなかった一世はもちろんだが、市民でありながら収容された若者たちがアメリカに反感をもったのは当然であり、市民権を放棄して送還船で日本へ帰った者もかなりの数にのぼった。1943年1月、WRA (戦時転住局) によって西海岸地方をのぞいた地域への再定住が許可されると、ほかの収容所では二世を中心に多くの収容者が外部へ転住したが、トゥーリレイク収容所ではその特殊な事情から最後までとどまった人びとが多く、終戦の翌年3月まで存続した。

この収容所の出来事の詳細は新聞や *TIME* などの雑誌によって全米各地に報道された。これにより日系人は合衆国に不忠誠、騒動をおこすならずもの集団であるという偏見をアメリカ人に植えつけることにもなった。WRA の見解も同様であった²⁾。しかし不忠誠の人びとが英語第一研究室

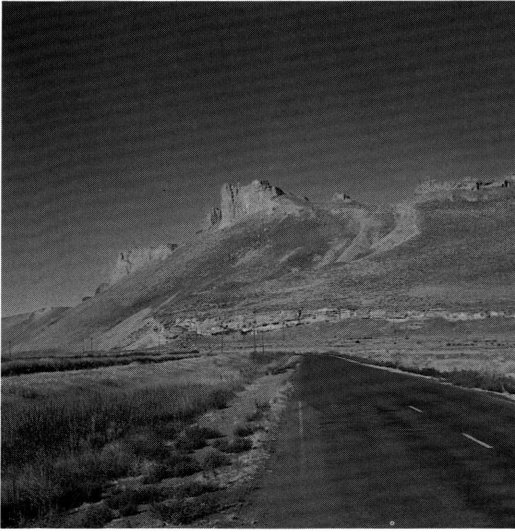
すべて過激な集団であったわけではない。このなかには、狂気にまきこまれることなく思索的な生活を送った人びともあった。そのような人びとによって発行されたふたつの雑誌『怒涛』と『鉄柵』は、いずれも帰米二世を中心とした日本語による文芸誌である。『鉄柵』についてはすでに『カリフォルニア日系人制収容所³⁾』、『南加芸芸選集⁴⁾』のなかで言及されているが、『怒涛』はまったく知られていない。筆者は調査のすえ、かつて『怒涛』の編集者であったモンテレーパーク在住の藤田晃に会って話を聞き、日米いずれの図書館にも収められていない『怒涛』創刊号から終刊号までを手にする機会をえた。

強制収容所内の文学活動を明らかにする一連の小論として、ポストン収容所についてはすでに述べたが⁵⁾、今回はトゥーリレイク収容所について述べる。

I. トゥーリレイク収容所の生活

1. 環境

トゥーリレイク収容所 (正式には戦時転住所: Tule Lake Relocation Center) はカリフォルニア州の東北部、オレゴン州との州境の近く、ニューウェル (Newell) の町はずれに位置していた。レイクとよばれているが、これはこの地が太古には湖の底であったことに由来する。あたりにはアメリカインディアンが用いたトゥーリと呼ばれる葦の一種が生い茂り、ペリカンの群れる湿原があり、一方では砂漠のような乾燥地が広がって変化に富んだ地形である。収容所はその乾燥地帯にあった。はるかかなたには巨大な溶岩丘 (butte) が横たわっている。これは、鮑の形をしていることから収容者からアバロニマウンテンとよばれていた。収容所内の土壌はきめの荒



キャッスルロックと収容所跡 1987年、筆者撮影

い溶岩質で、場所によって赤茶色、黒色と異なった色をしている。歩くとざくざくと音をたて、足首まで埋まり、ほこりが舞い上がる。樹木はまったく見当たらず、唯一の緑は、まばらに生えるセイジブラッシュとよばれる強い香りを持つヨモギの一種のみである。収容所の西には、通称「キャプテン・ジャックの砦」というモドック族の古戦場⁶⁾、キャッスルロックがそびえている。合衆国のインディアン政策に最後まで武力抵抗して滅亡したインディアンの戦場跡と合衆国に不忠誠の日系人隔離収容所が隣りあわせているのは、歴史の皮肉であろうか。

収容所の面積は32,000エーカー、最大時の収容人員は18,762名であった。住宅区域は9ブロックから成る8街区に分かれ、1ブロックには14棟の住宅とそれに付随する食堂、娯楽場、洗濯場、風呂などがあって、約250名が住んでいた。このほか、各所に病院、学校、仏教会、図書館、購買部などがある。時計修理所、靴修理所が設けられているのはいかにも物資不足の戦時らしい。鉄条網がはりめぐらされ、監視塔には24時間見張りの兵隊がいて、夜はサーチライトが所内をくまなく照らす。この光景はほかの収容所と同じであった。

最初に入所した日系人は、1942年5月、オレゴン州ポートランドおよびワシントン州ピュアラップ仮収容所から自発的に移動してきた147名の先発隊であった⁷⁾。彼らはレイクという名に魅かれて、緑深い湖のほとりの収容

所を想像してやってきた。だが、草木のない荒涼とした地に、黒いタールペーパーを張ったバラックが並ぶのを見て大いに失望したという。

2. 隔離収容所への道

1943年2月、WRA は17才以上のすべての収容者に忠誠登録を実施した。これには合衆国に忠誠か、日本の天皇に忠誠かを問う次のような質問が含まれていた。

No. 27. Are you willing to serve in the armed forces of the United States on combat duty wherever ordered?

No. 28. Will you swear unqualified allegiance to the United States of America and faithfully defend the United States from any or all attack by foreign or domestic forces, and forswear any form of allegiance or obedience to the Japanese emperor, to any other foreign government, power or organization?

収容者は、これらの質問に yes-yes と答えれば合衆国に忠誠、no-no であれば不忠誠という2つのグループに分けられて監理される結果となった。不忠誠組の男子はノーノーボーイと呼ばれた。トゥーリレイク収容所では忠誠登録を拒否した者6,000名、軍隊志願者はわずか59名で、収容所中最悪であった。その結果1943年7月15日、トゥーリレイク収容所は不忠誠の人びとを収容する隔離収容所となったのである。このときからトゥーリレイクは、他の9カ所の収容所とは異なる道を歩んでゆくことになった。

1943年10月、収容者の交換がおこなわれた。各地の収容所から12,000名の不忠誠の人びとが送りこまれ、同数の忠誠者がトゥーリレイクを去ったが、まだ6,000名ほどの忠誠グループが残されていた⁸⁾。この後も1944年3月、マンザナーから1,867名、同年11月にはハワイから二世男子67名というように移動が続いた。この結果、収容能力が約15,000名であったところへ18,000名余りが住むことになり、当然住宅問題が深刻化した。1944年1月現在の人口比は、一世33%、二世(婦米を含む)67%で、20才から25才の若者が総人口の16%を占めていた。

トゥーリレイクが隔離収容所となった理由はいくつか考えられるが、まず第1に先にあげたように、登録拒否者および不忠誠者が圧倒的に多かったこと、次に自給力

が大きい、長いあいだ多くの人びとを収容しておくのに適していたことがあげられる。収容者は優秀な農業技術を発揮して不毛の地を開墾し、農園をつくった。トゥーリレイクでも農事部がつくられた。例をあげると1944年11月には、1カ月間に野菜23万660ポンド、豚肉8万ポンドが収穫された。これらはそのまま収容者の食糧に供されたり、ほかの収容所の収穫物と交換されたりした⁹⁾。

なぜこの収容所に限って不忠誠者が多かったのだろうか。「他と比較してトゥーリレイクには非常に多くの独身の農業労働者がいた。彼らは貧しく、成功感を味わったことがないため、アメリカに反感を、日本に帰属意識をもつようになった」と WRA は分析している¹⁰⁾。しかし当時の日系社会では、農業労働者として各地を転々としていた英語の不自由な婦米二世は相当な数にのぼったと思われるため、トゥーリレイクだけが「問題のある人ばかりひきうけてしまった」とするのは妥当ではない。それは、忠誠登録を行なう際の監理局の対応のまずさにも起因すると考えられる。所内の新聞を見ると、かなり強引に登録を要求し、登録をしなければ出所はおろか、日本への帰還もできないと威圧的な態度をとっている。これが収容者に刺激を与えるきっかけとなって、婦米二世の青年たちが騒ぎ出して暴力事件を起こした。すなわち彼らは監理者側に協力する二世や、合衆国への忠誠を証明するために戦場で戦おうと呼びかける日系アメリカ市民協会 (JAACL) のメンバーを襲い、暴力をふるったのである。彼らは志願兵となった者の家族に「イヌ」というレッテルをはって白眼視した。このような暴力沙汰を恐れて多くの人びとは沈黙し、忠誠登録を拒否する結果となったようである。

しかし不忠誠者のすべてが親日的な思想を持ち、日本を心のよりどころとしていたわけではない。不忠誠者のなかには、日本へ帰る親について行くためにノーと解答した者、最初からトゥーリレイクに収容されていたため、他に移動したくなかった者などあいまいな動機による消極的不忠誠者もかなり存在した¹¹⁾。過激な婦米二世の親日派集団は事あるごとに人びとを煽動して収穫期の農園やモータープールでストを行ない、監理者側との対立を深めていった。1943年11月に WRA と住民代表の会談が決裂し、群衆心理も加わって騒動が起きた。死傷者も出る不幸な事件も頻発して、収容所は軍の管理下におかれた。住民の意見は、あくまでも WRA と対決する姿

勢を崩さないとする「現状維持派」と、意地をはらず当局と協力して収容所を改善しようという「現状打破派」に分かれた。結局住民投票で「現状打破派」が勝利したが、この2派の対立は最後までしこりを残し、収容所生活を暗いものにしたのである。

3. 国民学校の誕生

隔離収容所となつてのち、1943年11月、日本の教育に準じた国民学校がつくられ、二世、三世への日本人教育がおこなわれた。日本へ帰ってすぐに日本人として生活できるようにとの配慮からである。これは所内にある合衆国の公立学校¹²⁾とは異り、収容者自身の資金によって独自に運営された学校であった。国民学校は所内に8校あり、それぞれに15、6名の教師がいて、初等および中等教育を行なった。国民学校を援助する組織として、「中央日本教育会」が結成され、1年後の1944年10月には機関誌『練成』が発行された。「戦場に馳駆すべき秋である。国民総武装で、戦時産業に馳せ参ずべき身である。だが、それはどうにもならない吾々である。せめては後継者たる若い人々に児童に、皇国の道を徹底せしめたいと思うのである¹³⁾」と「発刊のこぼ」に書かれているように、徹底した日本の皇国教育が行なわれていた。教科書は日本のものをそのまま複製して使用した。そのほか所内で編集された小学校各学年用の『課外読本』、『作法要綱』が使われ、日本語ばかりでなく、天皇の臣民としてあるべき姿を教えることをめざした。国民学校発行の本はそれぞれ15セントから30セントで販売され、『作法要綱』は親のための啓蒙書も兼ねていた。

しかし、日本へ行ったこともない子供達に日本語を教え、天皇制の意義を説くことは困難であった。とくに何年かアメリカ公立学校で教育を受け、両親が日本へ行くことになったため途中から国民学校に移った子供達は、すでに民主主義的思考を身につけており、天皇中心の思想をすぐには理解することができなかった。これは、第7国民学校の校長・杉田新左衛門が『練成』のなかで、「一般児童の過去に於ける所謂基本教育は、何れも民主主義により哺くまれ、指導されたるを一朝にして、我が国の特質的美風を理解把握せしむるの甚だ難事たるは、克く一般諸兄の想像に難くないとするも、要は児童の日常生活を尊重し、而して有ゆる国民学校を通じて、皇民の何たるかを説き……¹⁴⁾」と述べていることからもうかがえる。また、教師の側も経験者は少なく、日本である程度高等教育を受けた者がにわか教師となって教壇

に立った。このため教え方も未熟で、教師、生徒の双方とも満足できる状態ではなかったと思われる。しかし、1944年7月、ローズヴェルト大統領がアメリカ市民の市民権放棄を認める公法第405号に署名すると、二世の市民権放棄、日本への帰国希望者が増加した。

収容所内の娯楽はほかと同様に、野球が盛んで多くの対抗試合がおこなわれ、その結果が新聞紙上を賑わしていた。文芸関係では、ヴァレー吟社、海紅俳句会、鮑ヶ丘俳句会、鶴嶺湖俳句会など多くの俳句会、ほかに鶴嶺湖川柳会、高原短歌会が活動していた。それぞれの会は1944年春ごろに結成され、月に2、3回国民学校や図書館で会合を開き、作品を文芸誌に載せていた¹⁶⁾。

II. トゥーリレイク収容所の新聞と出版物

収容所当局の監理下で発行された新聞は、*Tulean Dispatch* および *Newell Star* である。前者は収容所開設当時の1942年5月から発行された。これは WRA 直属のフランク・タナベ編集長以下、二世のスタッフ6人による編集。はじめは週2回の予定で騰写印刷され、無料で配布された。英文で毎号6～10ページだが、印刷機の故障で遅れることも度々あった。1942年7月17日からは2ページだてで *Daily Tulean Dispatch* と名が変わり、日刊となって、9月3日から『ツーリアン・ヂスパッチ』の名で1ページの日本語版も加えられた。1943年4月27日より日本語版は、『鶴嶺湖事報』と名を変えた。ここを「ツールレーキ」と呼んだ人びとが、漢字をあてはめて「鶴嶺湖」という優雅な名を用いたのである。これは2ページだてで、主に短詩型文学を掲載した文芸欄もあった。

隔離収容所となって人びとが移動しはじめる9月9日、*Tulean Dispatch* は Farewell Issue を発行した。以後は週3回の発行となった。代わって『鶴嶺湖事報』は4ページだてとなり、記事の内容が一変して戦局など日本関係の情報が多く盛り込まれるようになった。また、1942年から季刊の *Tulean Dispatch Magazine Section* という20ページくらいの英文の雑誌を出していた。これも隔離収容所となったのをきっかけに廃刊となった。所内の混乱のためであろうか、1943年10月31日から1944年2月21日まで休刊になり、44年2月22日から *WRA Center Information Bulletin* と変わって再び発行された。WRA の通達のほかに収容所内のさまざまな活動、たとえば教会、図書館、講演会、各種スポーツ、所

内の農園、売店の人員募集などの情報が掲載されている。

一方の *Newell Star* は週1度の発行で、1946年3月1日に収容所が閉鎖されるまで続いた。記録担当官 John Bigelow および副官の Robert Ross が編集責任者となり、その下で編集長イウォ・ナメカワ以下日系人スタッフが編集を担当した。タブロイド版、騰写版印刷りで英語欄と日本語欄に分かれており、後者は『鶴嶺湖新報』と名付けられていた。特別な時以外は、それぞれの欄は4ページづつの8ページだてで、週一回発行され、これも無料配布であった。記事は主に収容所当局からの通達、所内のニュースで、英文を読めない人びとのために翻訳を載せる日本語欄が設けられていた。しかし、日本語欄は英文欄の正確な翻訳ではなく抄訳で、一世、帰米二世向きの行事への案内などの方が多く掲載されている。それらは俳句、短歌、謡曲などの趣味のサークルや日本語による仏教講話などであった。

多少の文芸欄をもってはいたが、新聞の役割は WRA からの通達など収容所運営に欠かせない情報の伝達であった。しかし帰国希望者が多かったため、ほかの収容所の新聞に比べて再定住関係の情報がきわめて少ないことが特徴である。のちに詳述する『怒涛』、『鉄柵』のほか、トゥーリレイクでの出版物には加川文一による随筆集『我が見し類』および矢尾嘉夫の歌集『歸雁集』、泊良彦の歌集『渦巻』がある。いずれも騰写版印刷りで『我が見し類』は、『鉄柵』同人の編集による150ページの本で150部の限定出版、1部50セントで売られた。また、*Newell Star* に英文誌 *Tempo* の原稿募集が載っているが、今までの調査では入手することができなかった。

III. 鶴嶺湖男女青年団機関誌『怒涛』

1. 発刊の経緯

隔離収容所となって、いわゆる「yas-yas 組」がほかの収容所へ移動し、かわって不忠誠の「no-no 組」が入所して、所内の雰囲気は少しづつ変わりはじめた1944年3月12日、中央劇場で鶴嶺湖男女青年団の発団式がおこなわれた。青年団は前述のように総人口の16%を占める若者を対象としていた。帰米二世が中心であって純二世の参加者はごくわずかであった。団長は、ヒラリヴァー収容所から移動して来た帰米・丸山郁夫であった。彼はすでにヒラリヴァー収容所で、比良男女青年会を組織していた¹⁷⁾。この経験が評価されて団長に選ばれたのである。鶴嶺湖男女青年団は会費をとらず、演芸会、日

本映画の上映会、所民の絵画、工芸品の展覧会などを催して入場料をとり、利益を会の運営費にあてた。このような有料の催しをひんばんに開いたため、「金もうけ青年団」と悪口を言われたという。しかし娯楽の乏しい収容所生活で映画会などは人気があり、切符はすぐに売り切れた。丸山の中学時代の友人で同じく婦米二世の藤田晃は、こうして得た資金で外部から紙を買い、青年団の機関誌を発行し、団員に無料で配布した。機関誌は日本語で書かれ、騰写版刷りで『怒涛』と名づけられた。

1944年7月に発行された創刊号の表紙には嵐のなかを進む古代の戦士を乗せた船が描かれている。巻頭言のなかに橋本京詩は次のような詩を載せている。「……………如何に険しい茨の道が横たはってるとも怒涛の如く／怒涛の如くたいあたりしてゆけ／天水遠く相連る彼方のうましくにへ／黎明の彼岸へ打ち寄せてゆけ」日系人にとって戦争の勃発はまさに嵐の到来であった。排日の嵐のなかでもそれぞれ何らかの将来の希望をもって日々を送っていた若者たちは、戦争によってその希望を断たれてしまった。アメリカの市民権を所有しながら鉄柵のなかに追いやられた二世のなかでも、特に婦米二世が、かつて教育を受けた父母の国日本に心の拠り所を求めたのは当然であった。婦米二世は日本へ送られた時の年齢や教育年限によって個人差はあるが、当時20才前後になっていた若者たちはほとんどすべて日本の軍国教育を経験していた。アメリカ人として当然あるべき憲法上の権利を踏みにじられた彼らは、怒涛のようにあふれるエネルギーをほとばしらせて「彼方のうましくに」日本への想いを強くしたのであった。

青年団が結成されたのは、収容所の運営をめぐる先に述べた「現状維持派」と「現状打破派」の対立が深刻化しつつあった時期であった。青年団をつくる動きは1943年10月頃から見られたが、これら両派の対立とその解決が結団のきっかけとなった。二派の対立は、市民権の蹂躪や合衆国に忠誠か、不忠誠かという根本的な問題とは異なるものであった。良識ある人びとの眼には、単なるみにくい勢力争いとしか写らなかつた。自分たちがそういった対立に巻き込まれ、方向を見失っていくのは耐えられないと感じた若者たちは、やむにやまれぬ気持ちから団を結成したにちがいない。彼らは、人びとが対立し、暴力がまかり通って正常な判断力が失われていく事態に危機を感じていた。考え深い人が沈黙せざるをえないような状況を変え、収容所生活に意義を見いだしたい

というのが多くの若者に共通した気持ちであった。それは創刊号のつぎのような記事から推測することができる。

現状維持と言ひ、現状打破と言はれる言葉が、戦争の発端により、悲劇の主人公になったかの如く自任してゐる鶴嶺湖同胞間に、尙一層の悲劇的效果を演出してゐる。國と國との戦に犠牲になるとすれば、悲壮美を以てその有終を飾る事も出来やうが、内輪同志の泥試合以外の何物でもない。この種の言葉の環境が生む悲劇は、陳腐な新派悲劇以上に鼻につく。一種の時代錯誤者のみがこの安價な悲劇的雰囲気の中で躍ってゐる¹⁹。

団長の丸山は「発刊の辞」のなかで、「現下の時代を認識し、新しき時代の秩序を建設せんとする若き青年の魂の修練場となり、青年の意気と情熱とが怒涛を基調として生まれてくるとすれば、本誌発行の目的も達せられるわけである¹⁹⁾」と述べている。彼は、若者たちの指標となる機関誌を目指したのである。丸山は青年たちに何を望んだのであろうか。彼は「戦時體制下の日本²⁰⁾」と題した記事のなかで、物価統制、増税、国家総動員などの日本の戦時政策について述べ、日本人のおかれた立場の厳しさにひきかえ、収容所の人びとが安易な生活を送っていると、警告を発した。彼によればこの戦争は聖戦であり、青年たちはたとえ戦争に参加できなくても鉄柵のなかで無為に過ごすことは許されない。将来は必ず日本に役立つ人材となつて、日本で暮らすことを前提に日々を真剣に生きるようにと暗示している。

編集担当の藤田の回想によれば、創刊号は丁寧に英訳して WRA 当局に提出したが、それが承認されると第2号以下は翻訳提出の義務を免除されたため、当局による検閲は有名無実になり、日本についてのそれぞれの想いをかなり自由に書けたとのことである。WRA 当局も隔離収容所であることを考慮して比較的寛大な措置をとったと思われる。2号の「巻頭言」に、「1年有余の転住所生活を経て隔離所と呼ばれる特種の柵の中に住む私達の将来は日本にあることは疑もない事実であるが、若し戦後の日本で生活する為の準備も自信も持たないで只日本へ行けば……………と考へてゐるなら……………²¹⁾」とあるように、収容所生活を将来日本人として生きるための準備期間とみなす考え方が、2号以下にはかなり明白に書かれている。

丸山は、「収容所」を「修養所」に変えなければならぬという信念から、青年たちに日本人として生きよと示唆した。敵性外国人として拘束された婦米二世は、アメリカ人として生きること絶望していた。わずかでもアメリカ民主主義を信じていた二世たちは、ゴードン・ヒラバシやミノル・ヤスイ²⁰⁾のように強制収容は憲法違反であるとして合衆国を相手どって訴訟をおこすなどして闘った。しかし、婦米二世の多くは強制収容をアメリカの裏切りとうけとめ、アメリカ民主主義を信じることなく、かつて生活し、教育を受けた日本を精神的拠り所としたのであった。

かりに日本が戦勝したとしても、日本は彼らが期待するような状態で迎えてくれたであろうか。戦争前に日本へ行き、日本兵として従軍した二世たちへの日本軍隊内での処遇がどのようなものであったかを見れば、それは明らかである²¹⁾。彼らの多くはアメリカで育ったというだけの理由で、不当な虐待を受けたり、沖縄戦ではスパイの嫌疑をかけられて友軍の手で殺されさえたのである。しかし婦米二世が収容所の日常に絶望すればするほど、日本への憧憬は強くなった。彼らの憧れた日本は、現実とはかけ離れた実体のない理想郷であった。

2. 藤田晃と婦米二世文学

『怒涛』の内容は雑多で、総合雑誌風に編集されており、青年団の基本的な精神を表わす前述のような巻頭言に始まり、人生訓的な読み物、短編小説、詩、短歌、俳句、川柳、青年団野球部の試合結果とその短評などである。詩は、月、風、空などを描写して寂しさや少女の淡い恋心を歌ったものが多くを占める。花や木立などが登場しないのは、収容所が彼らの詩心をかきたてる自然の風物に欠けていたためであろう。投稿者は団員に限られていたが、第2号から一般の読者の投稿も盛んになり、俳句や川柳などかなりの年齢を感じさせる人の作品も含まれている。

このなかで編集者藤田晃は、ほぼ毎号に作品をのせている。掲載順に列挙すると、「汽車の中で」(創刊号)、「Mと私」(第2号)、「甦る家族」(第5号)、「或る環境」(第6号)、「影と陰」(第7号・終刊号)であり、「甦る家族」のみが戯曲、そのほかは短編小説である。彼はカリフォルニア州ブローレー生まれだが、2才のとき父の出身地・静岡県清水市三保に送られ祖父母に育てられた。早稲田大学政経学科に学んだが中退し、1940年、開戦の前年に父のもとへ帰った。開戦当時は、インペリアル・

ヴァレーで農業に従事しており、ポストン収容所を経て、不忠誠組となってトゥーリレイク入りした。

「汽車の中」では、勉学のため一時外部に出た二世の若い女性が再び収容所へ帰ってゆく旅を、「Mと私」では収容所での旧友との再会を、「或る環境」および「影と陰」のなかでは、収容所内の若い男女と彼らを取りまく家族の日常を描いている。いずれも習作の域を出ないものである。しかし、ほかの短編と比べて収容者たちの心理描写にすぐれ、たんたんとした語りくちの独特な作風をもっている。彼は、中学時代から文を書くことが得意で、映画を好み、映画評論を書いていたとのことである。当時彼は独身で家族もいなかったため、気楽に収容所生活を楽しむことができた。そして自由な時間を利用していつの日か作家になることを夢みて、創作に励んでいたにちがいない。

『怒涛』は1945年6月発行の第7号をもって終刊となった。編集者たちはこれが終刊号とは考えていなかったようである。もし日本の敗戦がなかったならば発行は継続されていたであろう。青年団員のひとり、加屋良晴は8月20日の日記に「その後のニュースは面白くなく聞かず、皆悲観してどうにでもなれという気持ちだ」と書いている。同年11月、青年団は鶴嶺湖男女青年団小史、青年団行事録、団員名簿を含む小冊子を発行して活動に終止符を打っているが、ここでは日本の敗戦や団員の将来についてはひとつもふれていない。終戦の結果、人びとは日本の敗戦に衝撃を受けて何も書くことができなくなった。特に若者たちの精神的指標の役割を果たそうとしていた『怒涛』は、その指標を見失ってしまったのである。この機関誌は、497人の団員を対象として約500部発行されていた。18,000人の収容者にたいしてこの機関誌が大きな影響を与えたとは言いがたい。しかし、のちに述べるように日系アメリカ人の文学活動のひとつの分野・婦米二世文学の芽をはぐくんだという点で、『怒涛』は重要な役割を果たしたといえよう。

IV. 文学同人誌『鉄柵』

1. 文学をめざす人びと

1944年3月、前述の『怒涛』よりも数カ月早く、文芸同人誌『鉄柵』が発行された。『怒涛』が青年団機関誌として啓蒙を目的としたのに対し、『鉄柵』は文学を好む人びとの作品発表の場であった。騰写版刷りの日本語総合雑誌で、編集者は山城正雄、野沢襄二(のちに穰

二)、河合一夫、1945年4月からは伊藤正が加わった。彼らはいずれも独身の帰米二世で、前述の藤田と同じくきわめて「身軽に」収容所生活を、むしろ楽しむことのできた若者たちであった。編集者のひとり、第8号のなかで次のように述べている。「経済から、社会から、人間から解放されて、ある期間でもいいから、自分の中に閉ち籠って見たいと思ってゐた……これを実現してくれたのはキャンプ生活であり、私の日常生活が感情生活と初めて一致したのである。時間はある。本はある。無料で電燈は廿四時間もつく。食堂の鐘は三度もなる……²⁴⁾」第2号の編集後記に、この同人雑誌の目標とするところは、日本で戦前に出ていた『収穫²⁵⁾』であり、内容の質を高めて、『収穫』をしのぐものにしたという抱負が述べられている。同人はお互いに作品の批評をしい、活発な意見の交換を通じてより高い水準の作品を生み出そうと努力したという。だが、「移民文学史の立派な最後を飾りたい²⁶⁾」とあるところから、同人のほとんどは日本への帰国希望者であって、移民文学もこれが最後であり、継承する者はもういないのだという寂しさを誰もがいだいていたにちがいない。

1944年夏、第4号が発行されたころには、二世の市民権放棄を認める法案が合衆国議会を通過しており、即時帰国希望者は勢いづいて8月22日には、過激な帰米二世たちが極端な親日派集団・祖国研究青年団を結成した。年末になると彼らは日の丸の鉢巻をして「ワッシュイ」という掛け声とともに所内を走りまわるいわゆる「ワッシュイ行進」をはじめた。のちに帰国奉仕団、報国青年団などの極端な日本精神の信奉者が現われ、人びとを煽動してWRAとことごとく対立した。これに反し、同人の大部分は帰米で帰国希望者ではあったが、極端な親日派集団に対しては批判的であり、彼らに惑わされず静かな生活を送りたいと願っていた。編集者のひとり野沢襄二は、「詩人も歌人も我々も退屈してゐた。渴していた旅人が砂漠で水を探りあてたやうなものだ²⁷⁾」と、文学同人結成の経緯を述べている。彼らは、日本へ帰国する日を待つあいだ作品を書くことに専念して、文学を通じて自己を主張しようとした。第7号に掲載されている「若人の素肌」のなかに、メスホール(食堂)にやってきて無法を働くならず者を正義感にあふれた若者がこらしめる場面がある。作者はたぶん食堂で働いていて、その経験を書いたと思われるが、実際には不可能なならず者に対する懲罰を作品のなかで実現することによって自

分の心を満たしたのであろう。

『鉄柵』には小説、随筆、評論、詩、俳句、川柳などのほか国民学校の生徒の作文、投書も掲載されていた。編集後記に水準に達していない作品は掲載せずという記事がある。すなわち投稿作品をすべて発表したわけではなく、編集部で取捨選択を行なったことがわかる。第2号では8編を保留にしたと記録されており、かなり厳しい選考が行なわれたことを物語っている。同人は、先の引用からもうかがえるように移民文学を生み出そうという理想に燃えていた。その情熱があったからこそ紙の入手難や印刷機の故障などに悩まされつつも、ほぼ2カ月に1度発行することができたのであろう。創刊号は800部印刷され、所内のキャンテーン(共同消費組合形式の売店)で25セントで販売された。娯楽に飢えていた人びとのあいだでよく売れ、版を重ねるごとに部数を増していった。1945年1月発行の第6号は新年号ということもあって140ページ、1200部以上も印刷し35セントで販売したが、あつというまに売り切れたという²⁸⁾。ほぼ毎号1000部発行したとのことであるから、『ポストン文芸』をしのぎ、収容所内の雑誌のなかで最高の発行部数であった。創刊号を発売したとき、編集者たちは売れゆきが気になって、そつとキャンテーンをのぞきにいったという。彼らは売り上げ金を私有せず、すべてためて、次号の資金にまわした。ときどき、その資金のなかから1羽のチキンを買う。それをストーヴにのせてスープにし、文学論をたたかわせながら皆で飲んだという。何というつましい楽しみであろうか。『鉄柵』はこのような編集者たちの情熱に支えられて9号まで発行され、戦争終了とともに終刊となった。

2. 『鉄柵』の特色

『鉄柵』の特色は、短詩型文学よりも短編小説にはるかに多くのページをさいていることである。第7号は創作特集号となっており、連続長編小説1編、短編小説5編を載せている。小説はいずれも収容所生活にテーマを求めたもので、ほかに見られるように日本の生活への追憶といったものは見当たらない。同人が真剣に収容所の現実を直視していることがうかがわれる。また、日本文学の模倣でない移民文学を生み出すのだという意気が感じられる。加川文一は第3号の随筆「つまらぬもの²⁹⁾」のなかで「ツールレーキに草木のみどりや水がなく、野に見るべき花がなく、甚だ自然の美に欠けてゐることだけは事実である」と書いている。日本の短詩型文学は、

自然があってはじめて成り立つ。だが、美しい自然のない収容所生活では短歌や俳句を詠むことはできないのであろうか。加川は言う、「ツーリレイキにも自然はある。自然のあるところに美が潜んでいない筈はない、それを汲み上げるのは……人自身にあるのであろう。此處では私たちの抱いてきた自然美に対する概念だけでは最早や十分に役立たない」と。一見「つまらぬもの」、つまり今までの自分の価値観では認めえなかったもののなかに文学のテーマを探りあててゆくのだという。すなわち、彼はトゥーリレイクの現実の直視から出発したのである。『鉄柵』のなかに過去に見た美しい日本の風景への追憶といったテーマがほとんど見られないのは、加川に代表されるこのような思想を同人の誰もがもっていたからであろう。これは『鉄柵』の特徴であり、それが『鉄柵』を単なる趣味の集まり以上のものにしていく。

『鉄柵』は、『ポストン文芸』と同様、他の収容所にも読者を持ち、収容所の雑誌のなかで最高の発行部数であったが、1945年8月、9号を最後として廃刊になった。同人の多くは戦後アメリカにとどまり、藤田晃を加えてロサンゼルスで「十人会」を結成、『羅府新報』に寄稿した。この会は発展的解消をとげ、同地での文芸同人誌『南加文芸』誕生へとつながっていく。『鉄柵』は『怒涛』と同様、日系アメリカ文学史上に大きな役割を果たしたのである。

おわりに

全米10カ所の収容所のうち唯一の「隔離収容所」であるトゥーリレイク収容所は、一世と帰米二世で過激な日本精神の信奉者のみが収容されていたと考えられてきた。しかし、この小論で明らかのように、帰国希望者のなかにも狂気にまきこまれず真剣に自らの歩むべき道を模索した人びとがいた。彼らは過激派集団とは一線を画していた。鶴嶺湖男女青年団機関誌『怒涛』をつくった人びとは、日本人として生きるための指針を若者たちに示そうという意欲に燃えていた。一方、『鉄柵』は移民文学をめざす人びとの発表の場となった。これらの雑誌にかかわった人びとは独身の文学青年たちで、家族や生計の責任などのないきわめて「身軽な」若者であった。彼らはあり余る時間を創作に費やし、帰米二世文学の源流をつくりあげていった。このふたつの雑誌に源を発した帰米二世文学の流れは、細いが絶えることなく続く。戦後の「十人会」を経て「南加文芸会」がつくられ、同人誌

『南加文芸』の創刊へとつながっていく。『南加文芸』は1985年に終刊となるまで20年もの長いあいだ続いた。アメリカで日本語の創作を続けていくことは、並大抵のことではない。加屋良晴³⁰⁾は『鉄柵』第6号から『南加文芸』の終刊号まで20年以上も騰写版を切り続けている。同人たちはアメリカで日本語の作品を書くことの空しさやたまたかいつつ創作を続けた。帰米二世文学を継続しようとする執念ともいべきこの情熱は、収容所での3年間の努力と結束が基礎となって生まれた賜物であろう。かつて『怒涛』の編集を担当した藤田晃は、日本で『農地の光景』、『立退きの季節』などの小説を出版し、帰米二世文学の存在を広く知らせることになった。トゥーリレイク収容所は、このようにして帰米二世文学揺籃の地となったのである。

謝 辞

資料収集にご協力下さったカリフォルニア・ファーストバンク歴史資料室室長・岡省三様、『怒涛』を提供して下さい下さった藤田晃様、貴重な日記を公開して下さい下さった加屋良晴様の両『南加文芸』同人、『鉄柵』を提供して下さい下さった移民研究会会員大鹿康広様、収容所の経験をお話下さったフレズノ在住のヨシノ・ヤマモト様、調査の便宜をはかって下さった宮野友美子様、ハンフォード中学校教諭瀬光悟・惇子様ご夫妻のご厚意に御礼申し上げます。なお、この研究は東京家政大学特別研究費の援助によっておこなわれたものです。

註

- 1) Tule Lake は片仮名で「ツールレーキ」、「ツーリレーキ」、「トゥールレイク」などと表わされているが、本稿では現地の発音にもっとも近い「トゥーリレイク」を採用した。
- 2) *Tulean Dispatch*, 1943年7月20日付。
- 3) 白井 昇：『カリフォルニア日系人強制収容所』（東京、河出書房新社、1981年）pp. 185—191
- 4) 藤田 晃編『南加文芸選集』（東京、れんが書房新社、1981年）pp. 190—204
- 5) 『東京家政大学紀要』第27集、1987年、pp. 33—41
- 6) Kintpuash, 通称キャプテンジャック率いる175名のモドック族は、ニューウェルから10マイルほど南の溶岩台地にたてこもり、約1,000名の合衆国軍

- と1カ月戦う。3分の2が女・子供であったため、1873年6月1日降伏。Kintpuash は、同年10月3日、オレゴン州フォート・クラマスにおいて絞首刑となる。
- 7) 『鶴嶺湖新報』1945年5月25日付。このほか収容者の移動、所内人口については *Newell Star* に詳しい。
- 8) WRA : *Impounded People, Japanese in the Relocation Centers*. Washington DC, U. S. Government Printing Office, 1946. p. 176
- 9) 全米10カ所の収容所で、あわせて1万エーカーを開拓、1943年度には野菜4,100万ポンド、豚肉100万ポンドの収穫を得ていた。トゥーリレイク経験者の話によれば、レタス、トマトなどのほか白菜、ごぼう、きのこなどあらゆる日本野菜が収穫されたとのことである。
- 10) *Tulean Dispatch*, 1943年7月20日付。
- 11) 同上。
- 12) 1944年末の WRA 調査によれば、全74ブロックのうち過激派集団のメンバーとなった17才以上の者の割合は、次のようである。①50—79%を占める12/74②20—49.9%を占める12/74③0—19.9%を占める20/74
- 13) 1943年11月1日付 *Tulean Dispatch* によると、公立小学校の生徒数は1200名。11月8日より授業が再開された。
- 14) 「発刊のこぼし」、中央日本教育会：『錬成』第1号（トゥーリレイク収容所、中央日本教育会、1944年）
- 15) 杉田新左衛門：「所感」、同上、pp. 69—70
- 16) それぞれの会の活動日と場所はつぎの通り。ヴァレー吟社、海紅俳句会＝不定期、個人の家、鮑ヶ丘俳句会＝毎週土曜日、国民学校、鶴嶺湖俳句会＝毎週金曜日、英語図書館、鶴嶺湖川柳会＝毎週火曜日、アイロンルーム、高原短歌会＝第2、第4日曜日、国民学校。
- 17) 比良男女青年会は機関誌『若人』を発行していた。
- 18) 「断想」、『怒涛』創刊号（1944年7月）、pp. 2—3
- 19) 「発刊の辞」同上、p. 1
- 20) 同上、pp. 4—8
- 21) 『怒涛』第2号（1944年8月）、pp. 1
- 22) ヤスイは当時ポートランド在住の弁護士、ヒラバヤシはワシントン大学3年生のクエーカー教徒。日系人のみを対象とした立退き命令、夜間外出禁止令は違法であるとして服従せず逮捕される。1943年5月10日の第1回大審院裁判で、西部沿岸禁足令は合法との解釈で有罪の判決を受け服役。
- 23) Jim Yoshida : *Two Worlds of Jim Yoshida*, Rutland, Vermont & Tokyo, Charles Tuttle & Co., 1975は、日本滞在中に開戦となり日本陸軍の兵士となった二世ジム・ヨシダの体験を描いている。
- 24) 山城正雄：「脱皮の期間」、『鉄柵』第8号（1945年4月）p. 11
- 25) 不明。戦後、東京で同名の同人誌が発行されたがこれとは別のものであろう。
- 26) 「巻頭言」、『鉄柵』第2号（1944年5月）
- 27) 野沢穰二：「『鉄柵』の想ひ出」、前掲書。
- 28) 同上。
- 29) 『鉄柵』第3号（1944年7月）pp. 6—10
- 30) 父は広島県地御前の出身。婦米二世。ヒラリヴァー収容所を経てトゥーリレイクへ。所内で結婚。戦後は、ガーデナーをするかたわら『南加芸芸』同人に参加、一貫して鉄筆を担当。現在ロサンゼルス在住。

参考文献

- 藤田、橋本編：『怒涛』トゥーリレイク収容所、鶴嶺湖男女青年団、1944—45年
- 山城、野沢、河合編：『鉄柵』トゥーリレイク収容所、鉄柵社、1944—45年
- 加川文一：『我が見し類』トゥーリレイク収容所、鉄柵社、1945年
- 矢尾嘉夫：『歸雁集』トゥーリレイク収容所、私家版、1945年
- 中央日本教育会：『錬成』トゥーリレイク収容所、中央日本教育会、1944年
- 藤田晃編：『南加芸芸選集』東京、れんが書房新社、1981年
- 白井 昇：『カリフォルニア日系人強制収容所』東京、河出書房新社、1981年
- 田村秀一：『檻の中の日米戦争』東京、航空新聞社、1984年

- Tanabe, Frank et al ed. *The Tulean Dispatch* Official Publication of Tule Lake Relocation Center
- Namekawa, Iwao et al ed. *The Newell Star* Official Publication of Tule Lake Relocation Center 『鶴嶺湖新報』(The Newell Star 日本語版)
- War Relocation Authority : *The Relocation Program*, Washington DC, WRA, 1943.
- Miyakawa, Edward. *Tule Lake*. Waldport, Oregon, House By The Sea Publishing Company, 1979.
- WRA : *Impounded People, Japanese Americans in the Relocation Centers*. Washington DC, U. S. Government Printing Office, 1946.
- WRA : *Community Government in War Relocation Centers*. Washington D C, U. S. Government Printing Office, 1946.
- Thomas, Swaine. *Spoilage*. Berkeley, University of California Press, 1969.
- Drinnon, Richard. *Keepers of Concentration Camps*. Berkeley, University of California Press, 1987.
- Bosworth, Allan. *America's Concentration Camps*. New York, Notson, 1967.
- The Lava Beds Natural History Association : *Captain Jack's Stronghold*, National Park Service, 1978.

Summary

Tule Lake is one of the ten Concentration Camps during the World War II. It was different from the other nine camps. When so called Loyalty Registration took place in February, 1943, the Japanese American inmates had to answer whether they were loyal to the United States or not. As some 46% of the inmates refused to register, Tule Lake became Segregation Center for the disloyals, most of whom were Issei and Kibei. Disappointed in the United States itself, they intended to go to Japan to be Japanese citizens.

Some of the disloyals formed some extreme pro-Japan groups and made resistance to War Relocation Authority. A lot of unhappy incidents happened and life in the camp got confused. But all of the disloyals were not trouble makers. Ikuo Maruyama gathered about 500 young people to form Tule Lake Young Men and Women's Association. The members published their bulletin named *Doto* (Rough Waters), whose editor was Akira Fujita. Fujita was fond of literature and wrote many short stories which depicted camp life.

Lovers of the literature also organized a group to publish literary magazine called *Tetsusaku* (Barbed Wire). They spent days trying to write poems, essays, short stories whose themes were their agony of being forced to live in the camp though they were the U. S. citizens. They made effort to create Kibei literature which was neither Japanese nor Caucasian literature.

After the war Akira Fujita and *Tetsusaku* group met again in Los Angeles and published *Nanka Bungei* (South California Literary Magazine), which continued for more than twenty years since then. So Tule Lake is thought to be important as a birthplace of Kibei Literature.